

経済成長における 教育と市民参加

エリック・ヴァンセント
・C・バタリヤ

経済開発の研究を一生の仕事として、私がアジ研で研究できるのは大きな喜びであり胸の高まりを覚える。アジ研は千葉市幕張にあるただのシンク・タンクとわけが違う。世界の経済開発に知的貢献をし続ける象徴的な存在だ。

多くの国々が経済成長に関わる様々な困難な問題の挑戦を受けている。例えば貧困、失業、医療、保健、環境悪化、犯罪、武力紛争などである。これらの問題は政策担当者だけの関心事項ではなく一般市民の関心事項でもある。市民が、政府が行っている開発政策についての正確な情報にもとづいて適切に判断を下せる環境にあることが大事だ。政府も市民が開発政策や開発行政についてしっかりと教育を受けられるよう措置するべきだろう。

さらに一般の人々が施策の形成に参加できる仕組みをつくる必要がある。こうすることにより政策定の好循環が生まれるだろう。

経済開発に関して市民が教育や参加の権利が得られなければ政策は往々にして政府と市民とで対立を引き起こしかねない。政府と市民が団結して経済の問題に取り組むことが求められるのにそれが分裂すると危機を生む発端となる。どのようにすれば両者が協力し合える仕組みを作れるかは良識ある個人個人が努力して考えなければならぬ問題である。政治的な亀裂はどの国々でも起こりうる問題である。フィリピンも例外ではない。フィリピンでは過去長い年月、政策面で諸々の取り扱いは問題に縛られ、それらが多くの分野にお



私の町のお祭り (Rosario, Cavite Photo compliments of the Most Holy Rosary Parish.)

いて経済開発達成を邪魔してきた。二〇一〇年、大統領選挙で国民は、新しい人物を選んだ。コラソン・アキノ元大統領の息子である。選挙運動中、ベニグノ・アキノ三世「Noyonoy」とのニックネームで呼ばれる。公正な政治を行い、フィリピンから腐敗を取り除くと宣言し各地を回った。そして七月、アキノ氏はフィリピン史上かつてない八五%という最高の信任を獲得した。

国民の信頼—これは社会的資本と言ひ換えられる—は継続的に目に見える利益に形を変えていかねばならない。先に述べたとおり、開発プロセスへの国民の参加、教育面メカニズムを強化するためにはまだ多くのなすべきことが残っている。現状のまま放置すれば前政権がはまりこんだ罠に再びとらわれてしまうことになる。

フィリピンは様々な困難を抱えているが、フィリピン人は意外と快活で楽観的である。人為的な不幸や自然災害にたびたび見舞われながらもお祭りやお祝い好きな地域社会をしっかりと保っていることができる。お祝いごとを大切にする地域社会 (Fiesta Society) はフィリピンの伝統であり、誕生日から宗教的なことがらまで大切な機会には必ずお祝いの行事が行われる。レチョン (豚の丸焼き)、パンシット (麺)、スバゲティ、魚介類、アドボ (肉を酢と醤油で煮込んだもの)、カレ・カレ (ピーナツソースの牛の尾っぽの煮込み)、肉のトマトシチュー (メチャド、カルデレータ、メヌードと呼ばれる) として、バーベキューはお祝いに饗される料理の代表格だ。ジュースやビールともよく合うのである。

人が集まってお祝いするときの熱気はすごいものがある。このエネルギーを国家や地方の開発促進のために振り向けられないものか

と考えさせられる。開発のプロセスで人々が協力していくにあたっては規制を作る必要がある。伝統的な農村社会のなかでは人々が協力しあうにあたって「バヤニハン」(＝共同体の一員になるという意味) と呼ばれている協力の規範を大切にす。例えば一家が引越をするときなど村の人々が総出で助け合うのである。バヤニハンはいまでも地域の共同体で実践されている。しかし、行政レベルとなるとそれが著しく欠けている。バヤニハンのような地域に根ざした非公式な協力の規範と行政が市民の参加と協力を引き出すために採用する公式な政策との間には溝があるのだ。政府が行う、法にもとづく公の制度や施策は、フィリピンがスペインのそしてアメリカの植民地であった頃の経験に由来している。従って、政府がとる施策はフィリピンの伝統的な文化的規範から編み出されたものではない。むしろ異質な文化が移植され変形されてきていったものである。それが自然と地域共同体の政治参加を妨げていった。開発のプロセスにおいて多くの地域社会や組織は開発という仕事を地方自治体や国の責任にゆだねてしまった。また行政サイドも、一般的に国民の政治参加を促進してこなかった。理由としては、社会には伝統的に結束力が欠けている、また一部には政治家が政策方針を熟知している、さらには国民の利益そっちのけの自己の利益を優先させるなどの点があげられよう。政治家が誠実であり不正などを働かないとすれば国民の政策参加が活発でないのは政府の呼びかけが効果的になされていないことによるものか、さもなければ、自分は何でもわかっているという政治家の自信過剰によるものによるものではない。

他に言われなくても自分はわかっているという政治家の自己過信は、政府の意思決定が強大な力をもつが故にとりわけ危険なものである。政策が

間違っていたらそのコストを払い、苦汁を飲まされるのは多くの国民である。他国も含め国民は歴史の教訓としてこの点を受けとめなければなるまい。

経済の開発にロケット科学的なもの

ものを仮定することは無意味である。繁栄を実現しそれを継続させるための定石や公式を知ることができればそれが多くの国の社会、政治、経済に蔓延る病根の多くを絶つための第一歩になるだろう。しかしことはそううまくはいかない。考慮すべき要素がありすぎ、また個々の条件も変化していく。また経済開発の研究は間断なく続く過程に関わるものであり経済の運営は決して自動的に行われるものではないことを示している。

日本や他の国の人も経済の開発についてもっと知って欲しい。それは堅い学問的なことばかりではない。学ぶことによりほかの社会が持つおもしろい、興味深い一面に触れるという喜びもあるであろう。フィリピンのお祭り社会 (Fiestas) もそのひとつである。



カレ・カレ (Photo compliments of footah.com.).